

近代日本におけるジョン・ラスキンの受容史

——アーネスト・フェノロサ「美学」講義（1890年）——

三木はるか（学習院大学）

1890年、アーネスト・フェノロサ（1853～1908）は、東京美術学校での美学講義の中で、ジョン・ラスキン（1819～1900）の美術論について講じた。岡倉覚三が通訳したこの講義の内容は、大村西崖の筆記ノートによって知られる。本発表では、この筆記ノートを糸口として、近代日本におけるラスキン受容の視点からフェノロサのラスキン論を再考する。

フェノロサは1878年、ハーバード大学のチャールズ・エリオット・ノートン（1827～1908）の推薦を受けて東京大学に赴任した。アメリカの最初期の美術史学教授であるノートンは、ラスキンの知友であり、ラスキンの著作の同国での遺言執行者であった。大学院時代のフェノロサが、このノートンの美術史講義を熱心に聴いていたことは、先行研究に指摘されているとおりでである。

1889年開校の東京美術学校での美学講義で、フェノロサが取り上げた6人の論者、すなわちウィリアム・スティルマン、オスカー・ワイルド、ホイッスラー、アルフレッド・イースト、イポリット・テーヌ、ラスキンのうち、最初のスティルマン（1828～1901）は、ノートンとともにアメリカでのラスキン受容の端緒を開いた人物である。1855年、美術雑誌『クレヨン』を創刊し、ラスキンの著作の抜粋や書簡を掲載した。

同講義でフェノロサが論じたのは、美術の定義についてであった。上記論者の説をすべて批判したのち自説を展開する。大村の筆記ノートには記されていないが、フェノロサが扱ったラスキンの美術論は、その内容から『近代画家論』第1巻の冒頭部分であることが分かる。ここでラスキンが論じていたのは、まさに美術の定義であった。しかし、フェノロサの講述内容を『近代画家論』の原文と比較してみると、上記筆記ノートに見る限り、ラスキンの議論の全容が伝えられていたとは言いがたい。だが「その著書すこぶる多く、その説一言を以て覆ひ難し。なかんづく近世の画家と題せる書、もっとも取るべきあり」と紹介されたラスキンが、少なくとも反駁するに足る論者として取り上げられていたことに疑いはない。

フェノロサ帰国後の東京美術学校で教えた岡倉、久米桂一郎、岩村透もまた、ラスキンの受容にかかわっていた。「岡倉氏の説たる審美論また『ラスキン』に拠れる所なるべし」とは、森鷗外の言である。久米は1904年の記事「ウィスラー対ラスキン及び印象主義の起源」の中で、フランスでのラスキン受容の立役者ロベール・ド・ラ・シズランヌの論考を抄訳している。岩村が『美術新報』等で、ラスキンについて重要な記事を執筆していたことは周知のとおりである。

したがってフェノロサの美学講義は、ラスキンからノートンへ、ノートンからフェノロサ、そして岡倉へと語り継がれていった、アメリカ経由のラスキン受容を跡付ける確かな証左であり、その後の東京美術学校でのラスキン受容の始点である。